

板沢先生の御霊に捧ぐ：略年譜

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

236

(終了ページ / End Page)

251

(発行年 / Year)

1962-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010749>

略年譜

明治二十八年一月五日

岩手県上閉伊郡釜石町大字釜石七〇六番戸（中妻板ヶ沢）に板沢真小雄、喜智の五男として生る（実は一月一日生）

明治三十一年旧三月二十六日（新五月十五日）

母喜智（四十一才）急逝す

明治三十四年四月

釜石尋常高等小学校に入校、在校中二年生より四年生にとびこし進級す

明治四十一年三月

右を卒業す

明治四十一年四月

岩手県立遠野中学校入学、その九月より伊能嘉矩方に寄寓す

明治四十三年二月十九日

父、真小雄（五十四才）没す

大正二年三月 右を卒業す（第八回卒業生、同期二十八名）

大正二年九月十一日

第二高等学校第一部乙類に入学す

大正五年七月三日

右を卒業す

大正五年九月

東京帝国大学文科大学史学科に入学、国史学を専攻す

大正八年七月十日

右を卒業す

大正八年八月二十八日

宮内省図書寮に勤務す（当時寮頭は

大正十年三月二十三日

森鷗外）

依願免本官、大谷勝真氏の話にて学習院に転することとなり、病気の理由にて退職するときは、その後一か年宮内省関係に奉職すること能わざるにより一身上の都合によりとして退職す

大正十年三月三十一日

学習院講師を嘱託さる

大正十年四月七日

横山鶴と結婚す

大正十年四月

東京帝国大学、大学院に入る

大正十一年六月二十日

学習院教授となる、（従って大学院籍は自然消滅）

大正十一年六月三十日

従七位に叙せらる

大正十一年八月十日

長女寛子生る

大正十二年四月五日

学習院中等科兼高等科勤務を命ぜらる

大正十二年四月

現住地、高円寺一ノ二九に住居を定む、当時の称は豊多摩郡杉並村東小

大正十三年一月二十三日

長男純男生る

大正十三年七月一日

正七位に叙せらる

大正十四年四月一日

成蹊高等学校講師（第一次）

昭和二年三月三十一日

恩師伊能嘉矩（五十九才）没す（大正十四年九月三十日）

大正十四年十一月十三日 学習院五十年史編纂委員会起草委員を命ぜらる

大正十五年二月二十五日 次女達子生る

昭和二年四月二十三日 東京駅を立ち欧州留学の途に上る

(同月二十八日熱田丸にて神戸解纜)

昭和二年七月一日 従六位に叙せらる

昭和四年二月十二日 筥崎丸にて神戸着、帰朝す

昭和四年三月一日 帝国学士院より日蘭関係交通史料調査を囑託さる

昭和四年四月一日―昭和八年三月三十一日 成蹊高等学校講師(第二次)

昭和四年五月三十一日

史料編纂掛における欧文日本史料取調を囑託さる

昭和五年一月十二日 次男靖男生る

昭和五年十一月二十九日 女子学習院講師

―昭和十二年七月十九日

昭和七年一月十三日 学習院、地理歴史科主任となる

昭和七年七月一日 正六位に叙せらる

(昭和七年八月十三日 兄、永良(五十四才)没す)

昭和七年十一月十二日 三男芳男生る

昭和八年三月三十一日 昭和八年度東京帝国大学文学部講師を囑託さる

昭和八年十二月 日本大学講師を囑託さる、爾来追放時に至る

昭和九年三月九日 勲六等に叙し瑞宝章を授けらる

昭和九年四月十八日 学習院中等科兼高等科勤務を免ぜられ、高等科兼中等科勤務を命ぜらる

昭和十年三月三十日 昭和十年度、東京帝国大学文学部講師を囑託さる

昭和十年十月十四日

日本古文化研究所長黒板博士よりオランダ風説書調査に関する委員を囑託さる

昭和十二年三月三十一日

昭和十二年度、東京帝国大学文学部講師を囑託さる

昭和十二年四月十二日

三女和子生る

昭和十二年五月十日

天皇、皇后兩陛下に「中御門天皇ノ御事蹟ト御時代」につきご進講す

昭和十二年七月十五日

従五位に叙せらる

昭和十三年三月九日

勲五等に叙し、瑞宝章を授けらる

昭和十三年三月十四日以降

爾後数年にわたり毎週月曜、皇后陛下に日本史についてご進講す

昭和十三年三月十八日

学習院教授を辞す

昭和十三年三月十九日

正五位に叙せらる

昭和十三年三月三十一日

東京帝国大学助教授となる

昭和十四年三月十六日

天皇陛下に「宣化天皇御事蹟」についてご進講す

昭和十四年三月二十九日

史学会評議員に当選す

昭和十四年四月五日

天皇陛下に「後鳥羽天皇御事蹟」に

ついでに進講す

昭和十四年四月十六日 大本山聖護院門跡道場において得度

受戒す

昭和十四年九月二十六日 天皇、皇后両陛下に「後醍醐天皇御

事蹟」についてご進講す

昭和十四年十月七日 準教師に補せられ、釜石市観音寺住

職事務取扱を命ぜらる

昭和十四年十一月二十四日 九州帝国大学法文学部において「日

—十二月九日 本洋学思想史(四十時間)を集中出

張講義をなす

昭和十四年十二月二十五日 律師に補せらる

昭和十五年二月十五日 日蘭協会(昭和十七年四月インドネ

シア協会と改称)評議員理事となる

昭和十五年十二月 在京遠中会副会長に推さる

昭和十六年三月三十一日 権大律師となる(寺門派)更に同

日、天台三派合併につき大律師とな

る

昭和十六年五月一日 文部省より国史概説編纂を嘱託さる

昭和十六年七月二日 文部省推薦図書委員を嘱託さる

昭和十六年九月八日 東京帝国大学特設防護団文学部参与

となる

昭和十六年十月一日以降 拓南塾において隔週に「南方史」を

講ず

昭和十六年十一月五日 日本出版文化協会図書推薦委員を委

嘱さる(昭和十七年七月七日また同
じ)

昭和十六年十一月十三日 本山より観音寺住職を命ぜらる

(昭和十六年十二月八日 太平洋戦争始まる)

昭和十七年二月十日 天台宗教学審議会議員となる

昭和十七年三月十一日 高等試験臨時委員となる

昭和十七年五月九日 東京帝国大学教授に任ぜらる

昭和十七年五月二十五日 高等試験臨時委員となる

昭和十七年六月一日 天台宗第二回中央教学講習会講師を

嘱託さる

昭和十七年七月八日 勲四等に叙し、瑞宝章を授けらる

昭和十七年十二月三十一日 興南錬成院講師を嘱託さる

昭和十八年二月二十日 天台宗の大東亜教学研究所員を命ぜ

らる

昭和十八年二月二十二日 高等試験臨時委員となる

昭和十八年五月十日 財団法人多摩聖蹟記念会参与を嘱託

さる

昭和十八年五月十二日 東京帝国大学特設防護団文学部団代

理団長を委嘱さる

昭和十八年五月十五日 従四位に叙せらる

昭和十八年五月二十六日 本山より戦時特別布教師として中央

委員会に推薦さる

昭和十八年六月五日 日本出版会、書籍委員、雑誌委員を

委嘱さる(辞令は七月七日付)

昭和十八年六月二十日 在京釜石学徒会結成式挙行、会長に推さる

昭和十八年六月二十二日 昭和十八・九年度学友会委員を委嘱さる

昭和十八年九月二十一日 東京帝国大学報国隊本部員を命ぜらる

昭和十八年九月二十四日 満州国に出張し大同学院研究所において日本史を講ず

昭和十八年十月一日 東京帝国大学特設防護団文学部副団長を委嘱さる(新機構)

昭和十八年十月二十八日 天台宗の臨時普通教師検定会委員を命ぜらる

昭和十九年一月十二日 日本出版会より歴史雑誌部門の資格審議会臨時委員を委嘱さる

昭和十九年二月十四日 天台宗の教師検定会委員を命ぜらる

昭和二十年四月 学術研究会議委員、同第十五部幹事、研究動員委員会幹事、出版委員となる

日本学術会人文科学系常任幹事を命ぜらる

昭和二十年四月二日 海軍嘱託となり、海軍技術研究所における戦争心理対策研究業務に従事することとなる

昭和二十年四月二十六日 家族(妻、三男、三女)岩手県遠野

に疎開す

昭和二十年五月二十六日 自宅被災にて焼失、壕と元大平氏宅空家にて四世帯雑居生活をなす

昭和二十年六月五日 神奈川県津久井郡川尻村一二一三番地八木茂市氏方に移転す

昭和二十年七月三十日 杉並区東田町一丁目一二〇番地に転入す、そのころ一時、本郷区西片町一〇番地いの二二号抜山大作氏方に寄寓す

(昭和二十年八月十五日 終戦)

昭和二十年十一月二十六日 学術研究会議の戦後思想問題特別委員を幹事を命ぜらる(神道問題につきてG・H・Qの諮問に答うべく研究をすすむることとなるなり)

昭和二十年十二月三日以降 毎週一回皇后陛下にご進講奉仕、追放時に至る

昭和二十年十二月十日 遠野より家族帰京す

昭和二十年十二月二十二日 夜分、御文庫において天皇、皇后両陛下に拝謁を賜わり、種々御下間に奉答す

昭和二十年十二月二十七日 夜分、高松宮御殿に参殿、御下間に奉答す

昭和二十一年一月二十二日、皇族御懇話会にて神道問題につきご

進講す
二十九日

- 昭和二十一年一月 學術振興会第二常置委員会委員を委
嘱さる
- 昭和二十一年二月十四日 東京帝国大学の憲法研究委員会委員
を委嘱さる
- 昭和二十一年三月二日 杉並区高円寺一丁目二六番地（後、
昭和三十二年九月三日付で二九番地
と変更）の焼跡に戻る
- 昭和二十一年四月六日 學術研究会職員内報をうく
- 昭和二十一年十一月十三日 赤坂離宮において皇太子殿下に「蘭
十六日 学の話」をご進講す
- 昭和二十三年一月二十四日 昭和二十二年政令第六十二号第三条
第一項により本官を免ぜらる
- 復興に挺身す
- 権少僧都に補せらる
- 昭和二十三年七月二十四日 観音寺復興入仏落慶法要を行なう
- 昭和二十三年八月十二日 平和観音堂落慶入仏供養を行なう
- 昭和二十五年十二月八日 追放解除さる
- 昭和二十六年十月三日 盛岡地裁より昭和二十七年年度、司法
委員、民事一般調停委員、商事調停
委員、宅地建物調停委員に選任の報
知あり
- 昭和二十七年一月十日 岩手県社会教育委員となる
- 昭和二十七年四月一日 法政大学専任教授となる
- 昭和二十八年四月一日 神奈川大学講師を嘱託さる
- 昭和二十八年四月二十九日 義宮殿下に日本史をご進講す
年三月
- 昭和二十八年九月七日 薬師堂落慶法要、本山より特派大導
師以下の来山あり
- 昭和二十八年十一月二十四日 少僧都に補せらる
- 昭和二十九年十二月四日 文学博士の学位をうく
- 昭和三十年四月一日 日本大学大学院講師を嘱託され、没
するに至る（但し三十六・七年度は
博士課程の学生なかりしを以て事実
上出講せず）
- 昭和三十一年四月十八日 釜石市より高円寺に住民登録を移す
- 昭和三十一年十月十五日 権大僧都に補せらる
- 昭和三十一年十一月三十日 文部省教科用図書検定調査審議会委
員を嘱託さる（任期二か年）
- 昭和三十三年三月十一日 大僧都に補せられ、天台宗寺門派の
教学部長に任せらる
- 昭和三十三年四月十九日 軽度の脳動脈硬化症にかかる
- 昭和三十三年五月三十一日 神奈川大学講師を依願退職す
- 昭和三十二年十月二十四日 文部省より私立大学研究設備審議会
委員を委嘱さる
- 昭和三十三年四月一日 法政大学史学科主任教授、法政大学
史学会会長となる（昭和三十四年度

また同じ)

昭和三十三年五月十六日 願いにより天台寺門宗の教学部長を解任され、教学審議会委員を命ぜらる

昭和三十三年十月 日本歴史地理学会会長に就任、没するに至る

昭和三十三年十一月一日 教科用図書検定調査審議会委員を委嘱さる(第二部会長に就任)

昭和三十四年四月一日 私立大学研究設備審議会委員を委嘱さる(任期は昭和三十六年三月三十一日まで)

昭和三十五年四月一日 釜石市市誌編纂委員を委嘱さる権僧正に補せらる

昭和三十五年四月二日 天台寺門宗宗機顧問に任ぜらる

昭和三十五年十一月十日 日本人類学会昭和三十六年三十七年度評議員となる

昭和三十五年十二月二十四日 東京医科大学病院(内科)に入院す

昭和三十六年二月二十八日 ほぼ快癒し退院す

昭和三十六年四月二十七日 再度入院、内科には一週間ほどにて外科に移さる

昭和三十六年五月十五日 腹部切開の手術をうく

昭和三十六年六月二十六日 願いによって教科用図書検定調査審議会委員を免ぜらる

昭和三十六年七月二十九日 退院す

昭和三十七年三月二日 またまた発病、自宅において臥床、闘病生活に入る

昭和三十七年七月十四日 天台寺門宗本山より本覚院の院号を贈らる

昭和三十七年七月十五日 没す

昭和三十七年七月十五日 勲三等に叙し瑞宝章を授けらる

昭和三十七年七月十五日 僧正に補せらる

昭和三十七年七月十九日 杉並区高円寺二丁目、真盛寺において東京の葬儀を行なう

昭和三十七年七月二十九日 釜石市観音寺において釜石の葬儀を行なう

著書、論文目録

○未発表、未刊行のものについては⊗の印を付した。発表、刊行の分についてはは『』は著書、「」は論文および小文の類とする

大正七年 ⊗蘭人治下の台湾（訳稿）

大正八年 ⊗北島氏の東国経略（卒業論文）

大正十年 「運命に光あらしめよ」（養真一一七）

大正十一年 『最新日本歴史受験の研究』（高岡書店）

「もどかしい事です」（養真青年会「富嶽」三）

「随感録」（調和一三五）

「旧学習院に就いて」（学習院時報一）

大正十二年 「滝沢馬琴の書簡」（歴史地理四一ノ三）

大正十三年 「国史講座」（よろこび二ノ四）

「台湾見聞記」（歴史地理四三ノ四）

大正十四年 『修正日本歴史受験の研究』（高岡書店）

「北島親房の常陸下着は漂着にあらず」（歴史と地理一五ノ二）

「東亜の時局と歴史教育」（歴史地理四六ノ四）

「旧学習院の教育とその学風」（歴史地理四八ノ六）

大正十五年 「滿洲に於ける邦人の發展と其の将来」（地理

学研究三ノ一）

「青山忠徳君の追憶」（多紀郷友会「郷友」一〇一）

昭和二年 『日本歴史のまなこ』（帝國書院）

「奈良県宇陀郡水分宮の鐘銘に就て」（考古学雑誌一七ノ二）

「善逝主義」（輔仁会雑誌一二九）

「阿里山登り」（地理学研究四ノ三）

「或る志士の死—家里松壽につきて」（歴史地理四九ノ三）

「明治維新と南朝の遺裔」（歴史と地理一九ノ三）

「明治維新と南朝の遺裔」（歴史と地理一九ノ三）

「明治維新と南朝の遺裔」（歴史と地理一九ノ三）

三）

昭和三年 『学習院五十年史』（本紀執筆）

⊗和蘭略史（訳稿）

「伊能先生小伝」「台湾文化志跋」（伊能嘉矩著「台湾文化志」所載）

著「台湾文化志」所載）

昭和四年 「和蘭国立文書館に存する日蘭通交史料特に商館日誌に就て」（歴史地理五三ノ五）

「慶長の遣使支倉一行の跡を尋ねて」（史苑二ノ二）

「和蘭に存する維新史料、特に文久二年日本使節の和蘭訪問について」（明治文化研究五ノ六）

「日蘭通交の発端」（学習院輔仁会雑誌一三六）

「和蘭の政治及び教育に就いて」（学習院時報

「和蘭の政治及び教育に就いて」（学習院時報

「和蘭の政治及び教育に就いて」（学習院時報

「和蘭の政治及び教育に就いて」（学習院時報

一四)

「郷土史家の提携を希望す」(歴史地理五四ノ六)

昭和五年

⑧フアレンティン日本志(訳稿)

「日本使節羅馬入城図と称せらるる一壁画について」(学習院史学会々報一)

「鮮漁と和蘭の海事発展」(歴史地理五五ノ二)

「スロイス提督母堂訪問記」(明治文化六ノ一)

「羅馬法王庁図書館備忘録」(明治文化六ノ三)

「碧眼録」(学習院輔仁会雑誌一三八)

「蘭館員の観たる日本の郷土」(郷土創刊号)

「古四王神社考」(歴史地理五五ノ二)

「後光明天皇の御事蹟」(教材講座六ノ三)

「国史に現はれたる世界観の発展」(海軍省教育局思想研究資料四〇・四一)

昭和六年

「佐賀の蘭学者金武良哲先生に就いて」(中外医事新報一、一七七)

「採集帖より」(郷土研究五ノ六)

昭和七年

「蘭学の意義と蘭学創始に関する二三の問題」(歴史地理五九ノ一、二、五、六)

「鎖国時代に於ける外国婦人の入国禁止について」(史学雑誌四三ノ一)

「厚生新編訳述考」(史学雑誌四三ノ八)

「ボンペ・ファン・メーデルフォルトの日本に於ける医務報告書(安政四・五年について)」(中外医事新報一、一八八)

「蘭学の内容と蘭学者の態度」(明治聖徳記念学会紀要三三)

「蘭学の内容と蘭学者の態度」(明治聖徳記念学会紀要三三)

日本関係のオランダ人名(岩波西洋人名辞典所収)

「ライデンに於けるシーボルト記念展覧会」(中外医事新報一、二七八―七九)

「蘭学の發達」(岩波講座) (岩波書店)

「蘭船来航の由来」(人情地理日欧交渉文化号)

「厚生新編事攬要に就いて」(中外医事新報二二〇・二二)

昭和九年

「鎖国及び鎖国論について」(明治文化研究論叢)

「連綿性の原理」(互助二五)

昭和十年

『新体皇国史』四冊(第一学年用) (上級用前後編) (盛林堂) 実業学校用

「蘭学者としての景岳先生」(景岳会々報一)

「世界政策に雄飛したる和蘭東印度会社」(日本及日本人)

「日本科学史上に於けるシーボルトの地位」(科学五ノ二〇)

「歐洲に於ける日本学建設者としてのシーボルト」(日独文化講演集シーボルト記念号)

「山岡家所蔵の和魯通言比考について」(学習院史学会々報六)
 「松平定信と神武の道」(日本大学文学科研究年報一)

昭和十一年 『新体皇国史教授備要』三冊(盛林堂)
 『女子新体皇国史』三冊(盛林堂)

「伊藤圭介の蘭文「勾玉考」解題」(施福多先生文献聚影)

「碧眼に映じた四天王寺」(四天王寺三ノ四)

「国史に於ける文化圏と時代理念との関係」(歴史教育一ノ六、七、九)

「旧西班牙王室所蔵の日本甲冑・明治時代初期の西洋礼式論・陸軍楽隊が私人の招請に応じた始め」(愛亭史話)(学習院史学会々報七)
 「お公卿さまと穴一」(愛亭史話)(学習院史学会々報七)

昭和十二年 『阿蘭陀風説書の研究』(日本古文化研究所)

『原六郎翁伝』三冊(米林富男と共編)

「江戸時代の百科全書『厚生新編』」(東京日々新聞)

昭和十三年 「和蘭人の東方発展」(歴史教育一三ノ二)

「シーボルトの第一回渡来の使命と彼の日本研究特に日蘭貿易の検討について」(『シーボルト研究』所収)

「国際交渉秘録「出島蘭館日誌」村上博士の偉業」(書評)(読売新聞四月二十七日)

「村上直次郎博士「出島蘭館日誌」」(書評)(東京朝日新聞六月十三日)

「オランダ人の伝へた西洋科学」(ラジオ講演講座四)

「日本諸学講座自然科学史篇」(書評)(週刊朝日十二月四日)

昭和十四年 『伊能友寿翁年譜』・『伊能嘉矩先生小伝』

『新体皇国史新制版』四冊(盛林堂)

「日本と欧米との関係」(『日本文化史大系』江戸後期文化、所収)

「日蘭文化交流に於ける人的要素」(史学会編『東西交渉史論』所収)

「辞書及び文法書の編纂と蘭学の発達」(史学雑誌五〇ノ五)

「蘭学と儒学との交渉及び幕府の対蘭学政策」(『近世日本の儒学』所収)

「国学と洋学」(国語と国文学一六ノ一〇)

「日唐通交に於ける国書問題について」(史林二四ノ一)

昭和十五年 『杉田玄白の蘭学事始』(日本放送出版協会)

『昔の南洋と日本』(日本放送出版協会)

『国史を貫く壺国精神』(教学叢書特輯一五)

『大東亜共栄圏講座、一―四講』(ラジオ講演講座二二二)

『外人の観た「夜明け前の日本」』(国際文化)

『高島秋帆とその書』(書之友六ノ三)

『蘭学の形態と役割』(太平洋、蘭領印度特輯号)

『和魯通言比考について』(学鏡)

『和蘭人の墓について』(日蘭協会々報二)

『和蘭人の蘭印経営』(興亜時代二ノ一〇)

『華山先生が長崎に行ったかどうか』(新風土記一ノ三)

『御朱印船の話』(南方共栄圏大展覽会案内書)

十一月大阪高島屋
 『史上に見えた我が国と南洋の交渉』(青年と教育)

『オランダ、オランダ通詞』(富山房『国史辞典』二所収)

『紅毛受難記』(帝国大学新聞)

『国史辞典』(書評)(帝国大学新聞)

『人名と異名の話』(形成七・八)

『理論と実際』「噴水は水源より高くあがらぬ」

「蛇を竹筒に入れて得意になるな」(高円寺便り)

(1) ^以下(高)とあるは高円寺便り(樹心)

(釜石市宝樹寺樹心学寮発行)∨

『分給』「野火」「次代の前進」(高②)

「一日一日」「心身か身心か」(高③)

「放送を了へて」(高④)

「故山に親しむ」(高⑤)

「蔽蕪なる秋」(高⑥)

「郷土に寄する言葉」(高⑦)

「天祐と祈り」(高⑧)

『釜石鉱山略史』(一)―(五)(釜石史談(1)―(5))(かまいし六九一―七三)

『郷社尾崎神社』(釜石史談(6))(かまいし七四)

⑨観音寺板沢家相統系図稿
 『早稲田講義録国史』

『江戸時代に於ける地動説の展開と其の反動』(史学雑誌五二ノ一)

『江戸時代に於いて西洋科学思想の我が国に及ぼした影響』(歴史教育改題)一五ノ一、二、三)

『出島版の Almanak について』(学鏡)

『日蘭貿易の理解に役立つ種本の紹介』(日蘭協会々報三)

『古医方唱道の歴史的意義』(日本医史学雑誌一

二九〇)

『日本を中軸とする国際文化の交流「欧米」』(師範大学講座八)

『日本近世科学思想史』(一)(歴史一六ノ一)

「日本文化に影響せる外国人」(国史と人物)

目黒書店

「邦人の海外発展を必然的たらしめた海外依存物資の研究」(拓殖論叢) 日本拓殖協会

(紹介三題)「新撰洋学年表の蘭訳・函館戦争で悲壮の最後を遂げたシーボルトの孫・アイヌの研究」(歴史地理七七ノ五)

「種痘の日本起源拾遺」(東京朝日新聞)

「幸田成友博士著『聖フランシスコ・ザビエル小伝』(三田評論)

「和蘭略史稿」(上世より中世に至る)「(日蘭協会々報四)

「亜細亜に於ける日本人の活動」(東京日日新聞 一月六・七・八日)

「大東亜共栄圏の歴史的性格」(興亜時代)

「日本人の生命観」(建武六ノ二)

「囑託」(歴史教育一五ノ三)

「最近の日本歴史の良書」(東京朝日新聞、四月六日)

「菊池勤王史」(書評)(東京朝日新聞七月二日)

「御達者」(放送、創刊号)

「御達者と御蔭様」(修験)

「自信をもって」(高⁽⁹⁾) (樹心)

「戦陣訓・運だね」(高⁽¹⁰⁾)

「春来りなば」(高⁽¹¹⁾)

「お達者とお稽古」(高⁽¹²⁾)

「宝樹ヶ丘のアンテナ」(お蔭さま) (高⁽¹³⁾)

「散りきれ」(この母この子) (高⁽¹⁴⁾)

「三敬」(高⁽¹⁵⁾)

「涼風」(高⁽¹⁶⁾)

「神の語義」(高⁽¹⁷⁾)

「一億の力一人の力(上)」(高⁽¹⁸⁾)

「一億の力一人の力(下)」(高⁽¹⁹⁾)

「なっちょい」(高⁽²⁰⁾)

「村社八雲神社、大天山観音寺」(釜石史談⁽⁷⁾)

(かまいし七六)

「薬師堂敬天律師」(釜石史談⁽⁸⁾) (かまいし七八)

「明峰山石応寺」「佐野直方の墓」「菊池熊太郎」(釜石史談⁽⁹⁾) (11) (かまいし七九)

「女坂の殺生禁断碑」(かまいし八〇)

「台場と大砲場」「平田の御番所」(かまいし八一)

「釜石の沿革(1)―(4)」(かまいし八二―八五)

「南方圏文化史講話」(盛林堂)

「日本人の南洋発展史料」(工業技術)

「蘭医を煩はした難病の話」(文芸春秋)

昭和十七年

「和蘭の蘭印経営史」(明治聖徳記念学会紀要五七)

「甲板考」(学燈四六ノ六)

「日欧通交史」(書評)(三田新聞八月五日)

「梅里先生」(文芸春秋)

「南方圏文化問題総論」(大日本仏教会編『南方宗教事情とその問題』所収)

「日本と呂宋」(東京日日新聞)

「必殺の断と必活の妙」(帝国大学新聞七月六日)

「めぐり来る日を前に」(帝国大学新聞一二月七日)

「寝てゐて人を起すべからず」(高20)(樹心)

「紙つぶて」(高20)

「天災と国防」(高20)

「有成」(高24)

「釜石史談続き」(高29)

昭和十八年

④遠野南部氏の動皇事歴

『天壤無窮史観』(日光書院)

『釜石史談釜石製鉄所産報史料』(報国真道会)

「ジャカルタの文書館」(インドネシヤ協会々報六)

「千古独見の士林子平」(耕心学堂の「鉄斎筆十二賢哲像」の解説)

「江戸時代に於けるイタリアの認識」(イタリア三ノ六)

「爪哇」(富山房『国史辞典』四所収)

「拓南壮行」(東京新聞二月九・一〇日)

「松平定信と神武の道」(日本学研究三ノ二)

「南方への文化動員」(南洋経済研究四月号)

「天壤無窮史観」(政界往来一四ノ五)

「指導原理としての日本精神と南方民族」(関西大学新聞五月二五日)

「事変六周年学徒に慰ふ」(帝国大学新聞七月五日)

「上代日本人の生命観」(紀元二千六百年三ノ六)

「日本人の南方発展史概説」(三省堂依頼)

「大東亜の指導原理としての神道」(関西大学新聞)

「伝統の反省」(成蹊教育三七)

「大東亜文化の昂揚」(毎日新聞一二月七日)

「神州不滅」(放送三ノ一二)

「急いでまはれ」(統高円寺だより1)(以下(統高)とあるは統高円寺だより)(樹心)

「畏れ多い御事」(統高2)

「拓南壮行(上)」(統高3)

「拓南壮行(下)」(統高4)

「鷲ヶ陵寮」(統高⑤)
 「今日だけが一大事」(統高⑥)
 「在京金石学徒会」(統高⑦)
 「一筋の道」(日光書院)
 「機と勢と形」(改造二六ノ一)

昭和十九年

「大東亜文化の交流」(朝日新聞一月一日・二日)
 「必克の皇謨」(読売新聞一月一日)
 「大東亜民族の系統と興亡」(国祭文化一月)
 「戦ふ母」(修養団機関誌「向上」「白ゆり」)
 「伝統と創造」(婦人公論三月)
 「大東亜の文化交流」(知性三月)
 Interchange of Culture, Nippon times May 11.

「暗渠日和」(東京毎日新聞三月五日)
 「権威と魅力」(東京新聞三月六日)
 「羅山の扁額」(日本読書新聞三月一八日)
 「大義に徹する実践」(言論報国四月号)
 「一筋の道」(帝国大学新聞五月一日)
 「亜細亜一光世界一光」(歴史一九ノ五)
 「扇子の音米人を驚かす」(朝日新聞六月七日)
 「楠公精神に学ぶ」(帝国教育会雑誌)
 「戦争目的の凜然たる把持」(構想一〇月号)
 「一億碧血のいぶき」(陸軍画報一二月号)
 『中等皇国史』(中等教科書株式会社)
 『皇国史観』(文部省教学局)

昭和二十年

「最近史学界の展望」(日本語一月号)
 「時局随想」(同苦共楽)(時局日本二月号)
 「国史教育に就いて」(言論報告二月号)
 「課外講座」(国史学)(大学新聞三月二一日)
 「戦列随想」(殿軍強化論)(同盟通信三月二四日)
 「豊破り温公」(大学新聞七月一日)
 「デンマルク国の復興」(仏教文化二ノ一)
 「蘭学の話」(朝日新聞社「週刊少国民」)
 昭和二十二年 「西洋人の書いた日本歴史の乗」(日本歴史八)
 昭和二十三年 「衣食住の歴史」(羽田書店)
 「蘭学に於ける人文科学の問題」(日本歴史一)

昭和二十四年

昭和二十五年

「日蘭貿易史」(平凡社)
 「釜石市年表」(釜石市役所)
 『俳痴年譜』(釜石市工藤家)
 「岩手海浜史信」(日本歴史三〇)
 「俄大名の家臣団」(日本歴史三一)
 「工藤先生と啄木」(かまいし千夜一夜)(以下(か)とあるは、かまいし千夜一夜)(岩手毎日新聞)
 「昔の俳人(1)―(5)」(か)
 「マタギの善兵工」(か)
 「葉巻六十箱の資本」(か)

- | | | | |
|--|---|---------------|---------------|
| <p>昭和二十六年</p> <p>「千島」(か)</p> <p>「一山」(か)</p> <p>「増産」(か)</p> <p>「童謡」(か)</p> <p>「ネズミ」(か)</p> <p>「又聞帳」(か)</p> <p>「三貫島」(か)</p> <p>「中根と与板」(か)</p> <p>「浜氣質」(か)</p> <p>「百五十年前の釜石の物資」(か)</p> <p>「鱈の話」「章魚の話」(か)</p> <p>「秋溪詩稿」(か)</p> <p>「まぎり」(か)</p> <p>「挨拶」(か)</p> <p>「鉱山史話(1)―(11)」(か)</p> <p>「おなどり(掠奪婚)」(か)</p> <p>「かみしめて見たい言葉」(か)</p> <p>「カフェー考」(か)</p> <p>「遅れと気おくれ」(社会時評)(以下(社)とあるは社会時評)(岩手日報)</p> <p>「教育の盲点」(社)</p> <p>「箒馴れの反省」(社)</p> <p>「教育と教養」(社)</p> <p>「旗振り希望」(社)</p> | <p>昭和二十七年</p> <p>「俳痴忌」(社)</p> <p>「製鉄遺跡の発見」(法政大学史学会々報四)</p> <p>「草荒と帆待」(日本歴史五一)</p> <p>「人生六十年」(社)</p> <p>「寒に思う」(社)</p> <p>「八十年前の二月」(社)</p> <p>「津波の記念日」(社)</p> <p>「漢字と言葉」(社)</p> <p>「酪山乳水」(社)</p> <p>「如是我聞」(社)</p> <p>「上京雑感」(社)</p> <p>「菊池熊太郎伝(1)―(2)」(岩手毎日新聞)</p> <p>「菊池篁三郎伝」(岩手毎日新聞)</p> <p>「世紀の祝典」(岩手毎日新聞)</p> <p>「天瑞句抄」(岩手毎日新聞)</p> <p>『日本社会経済史1』(法政大学通信教育部)</p> <p>「蘭学史に於ける人文科学の立場」(法政大学史学会々報五)</p> <p>「徳川吉宗」(日本歴史五六)</p> <p>「阿蘭陀通詞の研究」(法政大学文学部紀要一)</p> <p>「蘭船プレスケンス号の南部入港」(日本歴史六八)</p> <p>「近世初期の時代理念」(歴史教育二ノ一)</p> <p>「江戸時代に於ける洋書の輸入と現存状態」(学</p> | <p>昭和二十八年</p> | <p>昭和二十九年</p> |
|--|---|---------------|---------------|

鑑五ノ一二)

「蘭学とその系列、長崎江戸で覆刻した蘭書」
 (洋学ことはじめ展目録)

「日本人の挨拶」(心七ノ六)

「学問と師弟」(法政大学通信教育史学科日より
 一)

昭和三十年 『日本とオランダ』(至文堂)

「悟真寺の丘」(江戸長崎談叢二ノ一)

「江戸時代西洋文化の受容」(『明治文化史』概説
 編所収)

「鎖国とその解釈」(歴史教育三ノ一〇)

「最澄」(現代仏教講座五巻)

「地域課題と一般課題」(法政大学通信教育史学
 科日より三)

「海潮音」(岩手東海新聞)

「岩手東海新聞千号に寄す」(岩手東海新聞)

「破れた中学生の夢」(岩手東海新聞)

「リンゴの便り」(岩手東海新聞)

「北佐久郡志を見て」(岩手東海新聞)

「禁煙発心記」(かまいし)

昭和三十一年 「オランダ語から英語へ」(法政二高歴史研究
 七)

「卒論のテーマ」(法政大学通信教育史学科だよ
 り七)

昭和三十二年

「山響」(かまいし)
 「日本と東京」(日本歴史二〇三)
 「南部藩に於ける沿岸富豪の二形態」(歴史地理
 八七ノ一・二)

昭和三十三年

「オランダ風説書について」(大東急記念文庫第
 二回文化講座)

「蘭学発達の基盤及び契機としての漢学」(法政
 史学一一)

「洋学界の新進馬場兄弟」(歴史教育六ノ一一)

「出島、長崎、投銀、南蛮人」等(河出書房新
 社、『日本歴史大辞典』所収)

昭和三十四年

『日蘭文化交流史の研究』(吉川弘文館)
 「蘭学事始と前野良沢」(文庫九一)

「啄木のはがき」(学鑑五六ノ三)

「芝蘭堂の新年会図の題言について」(大東急記
 念文庫「かがみ」創刊号)

「洋式衆隊」(日本歴史一二八)

「蘭学事始」(文部省資料四月号)

「人間形成の問題―松平定信と神武の道―」(日
 本歴史一三六)

「蘭人の見た日本」(歴史教育八ノ一)

「藤井先生の学問と人となり」(歴史地理六九ノ二)

『シーボルト』(吉川弘文館)

昭和三十五年

『釜石市誌 史料編一』(釜石市役所)

「慶応二年オランダ出版の日本人書翰について」
(日本近代史学二)

「最近十五年における日本史学の発達」(法政大
学通信教育史学科だより一九)

「夜明け前という言葉について」(法政歴研七)

「箕作秋坪と福沢諭吉」(福沢諭吉全集一〇巻付
録)

「日本史学の発達と歴史教育」(日本歴史一四
二)

昭和三十六年
「日本とオランダとの関係」(歴史教育八ノ二二)
『釜石市誌 史料編二』(釜石市役所)

「地域課題と一般課題」(法政大学通信教育史学
科だより二三)(再録)

「貞享四年仙台領の吉利支丹(史料)」(歴史地理
九〇ノ一)

昭和三十七年
『釜石市誌 史料編三』(釜石市役所)

「諸国巡見使とその実際」(日本歴史一六三)
「鎖国時代における密貿易の実態」(法政大学文
学部紀要七)

年次不詳
④釜石雑考(稿本一冊)

「日本人の世界観の発展に就いて」(公余会第一
二回講演速記)(昭和六・七年ごろか)

『釜石市誌 史料編四』
おらんだ風説書集成